

第2部 課題解決実習実践検討会報告

【児童生徒支援コース】

氏名	実習校	課題研究テーマ	日程と形式	頁
小貫 優嘉	伊勢崎市立宮郷小学校	シャドーイングを取り入れた小学校英語科授業の実践	12月4日 授業を伴う実践検討会	96
川口 麻美	群馬大学教育学部附属小学校	分かる授業により児童のつまづきを克服する算数科学習指導	9月5日 授業を伴う実践検討会	97
河添 歩美	前橋市立大胡小学校	児童の思考力・表現力を育てる算数科学習指導の研究－言語活動の充実を通して－	11月20日 授業を伴う実践検討会	98
剣持 好司	渋川市立豊秋小学校	学びのユニバーサルデザインを活用した理科の授業	11月7日 授業を伴う実践検討会	99
岡田 由美	沼田市立沼田東中学校	中学校国語科における文章を読み深めるための指導－文章を視覚的にとらえる図表化活動を取り入れて－	11月13日 授業を伴う実践検討会	100
鈴木 智信	安中市立東横野小学校	小学校高学年の国語科における書く力を育てる指導方法について－モニタリング育成による表現内容の構造化・推敲を通して－	11月1日 授業を伴う実践検討会	101
高橋 朋子	太田市立藪塚本町小学校	特別な支援が必要な児童を含む認め合える人間関係づくり～SELを活用した支援～	11月20日 授業を伴う実践検討会	102
藤井 智章	太田市立尾島中学校	伝え合う力を育む中学校国語科の学習指導－メタ認知の視点を取り入れた話し合い活動を通して－	10月31日 授業を伴う実践検討会	103
村田 政人	中之条町立西中学校	コミュニケーション能力を向上させる自由英作文の指導－中学校における英語のグループノートの活用を通して	11月14日 授業を伴う実践検討会	104
森坂実紀人	群馬大学附属小学校	「造形的な見方」を身に付ける図画工作科の鑑賞の指導の工夫－パフォーマンス課題とルーブリックを取り入れた授業の試み	6月27日 授業を伴う実践検討会	105

【学校運営コース】

氏名	実習校	課題研究テーマ	日程と形式	頁
石川 重昭	太田市立毛里田中学校	学校安全推進体制の改善・充実に向けて－学校安全担当教員による学校安全マネジメントの充実への取組を通して－	10月9日 授業を伴う実践検討会	106
糸井 広江	桐生市立相生小学校	充実した小学校生活のための連携体制の構築～保護者連携と学びをつなげる幼保小の交流を通して～	11月22日 授業を伴う実践検討会	107
大石 一弘	渋川市立赤城北中学校	教員の多忙感を軽減する学校運営の改善－ICT活用による校務の効率化－	12月6日 授業を伴う実践検討会	108
柴山 和宏	群馬県立利根実業高等学校	「人間力」を身につけた技術者を育成する学校	11月1日 実践報告会・実践検討会	109
野村 聡子	伊勢崎市立境剛志小学校	職能成長と組織力向上が実現する校内研修に関する研究～課題別グループの活性化を通して～	11月20日 授業を伴う実践検討会	110
福田 博之	前橋市立箱田中学校	「学校力」を高めるための校内研修～A中学校におけるOJTの実践を通して～	11月6日 授業を伴う実践検討会	111
増田 和子	前橋市立城南小学校	ビジョンを共有することで実現する学校組織の活性化～教師間コミュニケーションで作成する自己申告書の作成・活用を通して～	12月2日 授業を伴う実践検討会	112
柵木みどり	藤岡市立神流小学校	子どもたちが過ごしやすい学校生活を支える指導の在り方－指導内容の重点化と協働する教職員組織の充実－	10月31日 授業を伴う実践検討会	113

小貫 優嘉(児童生徒支援コース) 平成25年12月4日(水) 伊勢崎市立宮郷小学校

12月4日、児童生徒支援コース2年生の小貫優嘉さんの研究授業と実践検討会が、伊勢崎市立宮郷小学校で行われました。

小貫さんの課題研究のテーマは「シャドーイングを取り入れた小学校英語科授業の実践」です。小貫さんは、英語科の授業実践を通して自分の思いや考えを伝えることができる児童の育成に取り組む手だてのひとつとして、聞くことと同時にそのフレーズを繰り返すことで、聞く力と発話表現力を同時に伸ばすトレーニング法であるシャドーイングに着目しました。そして、市指定単元「英語で買い物しよう」と関わりを持たせた簡単な買い物の会話文について、ALTの協力を得てオリジナル音声教材を作り、パソコン室でパソコンに繋いだヘッドフォンから音声を聞き取らせて、シャドーイング練習を行いました。次第にスムーズに発音できる児童が増え、練習に慣れてきた時点で、次に絵本「おおきなかぶ」を題材として、比較的長い文章のシャドーイングを取り入れ、速さや強弱などを意識して反復できるように練習してきました。



そして本単元では、聞いた英語を単に真似するだけでなく、身体の動きや声色、表情を自分で考え表現することを身に付けさせることをねらって、絵本版「おおきなかぶ」に、英語ノート2(文部科学省)「Lesson8 オリジナルの劇をつくろう」の内容を組み合わせせた「劇バージョン」の台本を作成し、劇作りに取り組むこととしました。

研究授業では、班別のリハーサルを取り上げました。児童はすでに前時までに4つの班に分かれ、班ごとに配役を決め、役に合わせたセリフの表現の仕方を練習してきました。本時の視点は、リハーサルにおいて、役になりきって自分の目標に近づいた表現ができるようになるであろうというものでした。まず英語での挨拶や、「Leave It All To Me」を歌ってウォーミングアップの後、班ごとにリハーサルを行いました。小貫さんは声の高さやセリフの速さなど、前時にワークシートに記入させた一人ひとりの目標をチェックしながら、セリフの言い方や動作について個別にアドバイスをはさんで行きました。リハーサルを終え

た班は自分たちで反復練習し、最後に発表会の目標をワークシートに記入させ、次時への動機づけとしました。どの児童も目を輝かせ、生き生きとした表情でリハーサルに取り組んでいる光景が印象的でした。

授業後の実践検討会では、班ごとのリハーサルを指導者だけが見るのではなく、児童たちも他の班のリハーサルやアドバイスをみてその内容を共有するほうが、より“気づき”が生まれるのではないかと、ビデオを活用するなどして「見本」となる役を見せてはどうかなど、いくつかの提案がありました。



また授業の進め方では、児童への指示は場当たりのではなく明確に行う必要があること、指示は基本的に英語が望ましいこと、4班同時の練習では学級全体を見渡せないためTTが望ましいことなどが指摘されました。

今回は、校長先生、教頭先生、担任の先生を始め、伊勢崎市立宮郷中学校から木暮政美教頭先生にもご参加いただき、多くの貴重なご助言を頂きました。本学からは懸川教授、武井教授のほか、院生の参加もあり、充実した検討会となりました。ご参加いただいた先生方に深く感謝いたします。(文責・音山若穂)

川口 麻美(児童生徒支援コース)

平成25年9月5日(木) 群馬大学教育学部附属小学校

9月5日、児童生徒支援コース2年生の川口麻美さんの研究授業と実践検討会が、群馬大学教育学部附属小学校で行われました。



川口さんの課題研究のテーマは「分かる授業により児童のつまづきを克服する算数科学習指導」です。レディネステストやワークシート、話し合い活動での見取りによって児童の知識・技能や考え方を把握しながら、自分の考え方を発表させたり、他の人の考え方に触れさせたりすることを通して、多様な考え方があることに気付かせ、一人ひとりが「分かる」ことを実感できるような授業づくりに取り組んできました。

題材は4学年「計算のやくそくを調べようー計算のきまりー」でした。レディネステストと事前アンケートの結果から、かっこや四則混合の式の

意味や計算順序については、おおむね理解することができる素地はできていましたが、児童によっていろいろな解き方、考え方がみられること、また、問題の意味が分からなかったり、理由やしゅみがかんがらなかつたりするときには、つらさや大変さを感じている児童が多いことが示されました。

研究授業では、3つの整数の加法の式を示し、どのように計算するかを考えさせたあとで、簡単に計算できる工夫について考えさせました。川口さんは、ノートを見て回りながら児童の説明を聞くことに時間を掛け、一人ひとりの考え方に丁寧に寄り添っている点が印象的でした。児童の発表場面では、児童によって「ぴったり数」のとらえ方が異なり、どのような計算順序が「簡単」ととらえられるのかにも違いがあることが示され、川口さんはそれぞれの考え方を尊重しながら、結合法則や交換法則についての理解を深めていきました。



授業後の実践検討会では、「ぴったり数」の概念の検討を始め、つまづきや、一人ひとりの学びの傾向をどう捉えるか、といった点が焦点となりました。また、授業展開や指導上の留意点についても細部にわたって指摘がなされ、川口さんの今後の授業づくりに向けた貴重な学びとなったことと思います。



今回は指導教員のほか、学級担任・吉井健人先生をはじめ、学級経営アドバイザー・植木文貴先生、本学から渡部孝子先生、武井英昭先生、矢島正先生、そして教職大学院2年次生にもご参加いただき、多くの貴重な示唆をいただきました。感謝申し上げます。(文責・音山)

河添 歩美(児童生徒支援コース) 平成25年11月20日(水) 前橋市立大胡小学校

11月20日、児童生徒支援コース2年生の河添歩美(ストレートマスター)の公開授業と授業検討会が、実習校である大胡小学校の5年1組で行われました。河添さんの課題研究テーマは、「児童の思考力・表現力を育てる算数科学習指導の研究—言語活動の充実を通して—」(仮題)です。

河添さんはストレートマスターですが、四月当初、始業式の段階から大胡小学校で課題解決実習を開始し、5年1組担任の安藤先生のもと、算数を中心とした授業を行ってきました。算数科で考える力とさらにそれを表現する力をつけさせるために、特に数、表、式、図などを、言葉を用いて相互に活用させる言語活動を充実させることで、児童を伸ばす努力を続けてきました。河添さんの授業の特色としては、いつも丁寧な授業の事前の準備がなされており、かつ児童の実態に沿った指導案を練り、授業時間内で、たっぷり操作活動を行って考えさせる授業に取り組ませる工夫がなされていました。また、クラスの中に溶け込んで、児童との間にしっかりした信頼関係が築かれていることが常に基盤としてあります。なかなか引っ込み思案で発表が苦手な児童もいる中で、児童自身が自ら考えて、根拠をもって説明する姿勢を身につけさせることは大変でしたが、確実にその姿勢が児童にも身につけてきました。本時では、河添さんの練りに練った準備に基づいた、優れた授業が参観できました。なお、本校では算数科は学年単位で少人数指導をされていますので、今回も場所は5-1ですが、5年生B班において指導がされています。



本時は、算数科で「図形の角を調べよう」という単元の中で、全7時間の中の3時間目の授業でした。三角形の内角の和が 180° であることを1, 2時間での既習事項として、さらに四角形の内角の和が 360° であることを確認させ、根拠をもとに児童にそれを説明させる授業です。本来の学習指導要領では、三角形は帰納的に、四角形はそれをつかって演繹的に説明することを求められており、教科書もそのような構成になっています。しかし、児童の実態を考えると、教科書のような指導方針では、特に学力が下位層の児童には自主的な説明がしにくいと想定されました。本時では、三角形の時の既習事項である帰納的手法も織り交ぜた上で、演繹的な考え方にも最後に触れます。その上で演繹的なやり方の重要性、利便性にクラス全体で気づかせるという、工夫がこらされた指導案に基づいて授業がなされました。それは高いレベルで成功を収めたと思われまます。長期間にわたり、丁寧なご指導を賜った大胡小学校の先生方に御礼申し上げます。

公開授業には実習校の先生方が小林校長、間々田教頭、服部算数教科主任、担任の安藤先生、本学M2も4名、M1も4名、他校の教員も2名、本学から武井教授、指導教員である山口、石川と多数が参加しました。授業後の研究会でも、児童が最後まで動機づけを高い状態で保っていたこと、それを保証する丁寧な教具の準備、児童への声かけの適切さなど、河添さんの授業に取り組む姿勢に賞賛の言葉を多く頂戴しました。また、本課題研究テーマの重要性についても、校長からも直接言及があり、課題研究を早急にまとめることが望まれます。(文責：山口陽弘)

剣持 好司(児童生徒支援コース)

平成25年11月7日(木) 渋川市立豊秋小学校

11月7日、児童生徒支援コース2年生の剣持好司さんの研究授業と実践検討会が、渋川市立豊秋小学校で行われました。

剣持さんの課題研究のテーマは「学びのユニバーサルデザインを活用した理科の授業」です。剣持さんは、理科を「実物や現象に触れることで疑問や仮説などの知的好奇心を持ち、それを学習者が主体的に実験や観察で理解や解決をする教科」ととらえ、学びのユニバーサルデザインのアプローチが「知的好奇心を持つ段階」



や「主体的に解決する段階」において学習者を支援する効果があるのではないかと考えました。

題材は6学年「水溶液の性質」でした。食塩水、炭酸水、塩酸、アンモニア水を使い、その性質や金属を変化させる様子を推論しながら調べるものです。剣持さんは、学びのユニバーサルデザインのアプローチをベースに、まず水溶液の見分け方の方法をいくつかの実験を通して理解させた後、児童が既習事項を活かし主体的に実験方法を選択し、自ら実験計画を立て、その計画に基づいた

実験を班ごとに行なって確かめさせるという単元計画を考えました。

研究授業は、単元計画の第2時で、4つの水溶液について蒸発実験を行うことを通して、何が溶けているかを調べるというものでした。まず、4つの水溶液を蒸発させてつぶが出るかどうかを予想させました。食塩水を蒸発させるとつぶが出ることは5学年の既習事項であることをふまえ、他の3つの水溶液についても同様の方法で蒸発させれば、つぶが出るかどうかを実験で確かめることにします。アルコールランプを使った実験のため、児童が安全に実験することができるよう、教師が実演して見せたり、一人ひとり火ばさみを持たせて蒸発皿のつかみ方の練習を行わせたりするなどの配慮を加えました。実験の結果はワークシートに記入させ、予想と比較させたうえで、気づいたことを発表させました。「炭酸水は、激しく泡が出た」、「塩酸は塩という文字が含まれるので塩つぶが出てくる



と思った」、「アンモニア水や塩酸、炭酸水には液体が溶けていると思う」など、児童の多様な気づきが見て取れました。本時の実験が、「知的好奇心を持つ段階」の学びを支え、次時から始まる気体が溶けている水溶液や金属を溶かす水溶液の性質の実験に繋がっていくことと思います。

授業後の実践検討会では、特に安全への配慮や、事実と考察・予想を分けて考えることの必要性などが焦点となりました。授業展開や指導上の留意点についても指摘があり、剣持さんの今後の授業づくりに向けた貴重な学びとなったことと思います。

授業後の実践検討会では、特に安全への配慮や、事実と考察・予想を分けて考えることの必要性などが焦点となりました。授業展開や指導上の留意点についても指摘があり、剣持さんの今後の授業づくりに向けた貴重な

今回は、校長先生、教頭先生を始め、指導ご担当の中澤伸子先生、吉永桂子先生、その他多くの先生方に多くの貴重な示唆をいただきました。研究授業には本学から佐藤教授、武井教授にも参加いただきました。感謝申し上げます。(文責・音山)

岡田 由美(児童生徒支援コース)

平成25年11月13日(水) 沼田市立沼田東中学校

11月13日、児童生徒支援コース2年生、岡田由美さんの公開授業が勤務校の沼田市立沼田東中学校(3年2組)で行われました。

岡田さんの研究テーマは、「中学校国語科における文章を読み深めるための指導—文章を視覚的にとらえる図表化活動を取り入れて—」です。人が何かを考えると、鉛筆、紙、付箋などの道具を使って情報を書き出して整理すると、考えやすくなります。岡田さんは大学院の1年目に、思考支援ツールとしての様々な図表の活用方法を検討しました。そして本年度は国語の説明的文章、文学的文章の読みに、図表化活動を積極的に取り入れ、説明文の構成の工夫とその効果を表の形で整理したり、小説の登場人物の行動に対する自分の解釈を2次元上に位置づけてとらえたりするといった実践を重ねてきました。

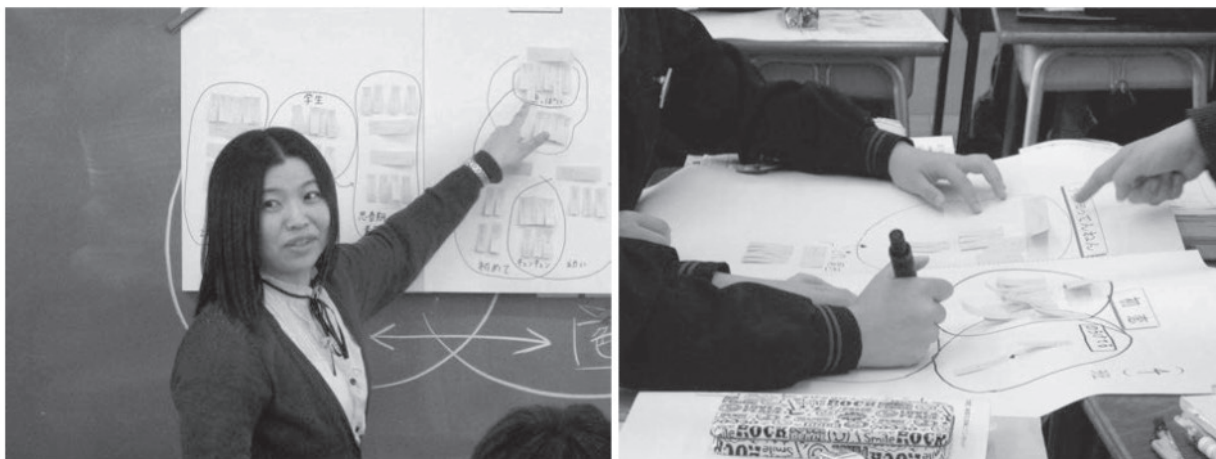
公開授業では二編の詩が扱われました。島崎藤村の文語定型詩である『初恋』と、島田陽子が大阪弁で書いた『うち 知ってんねん』です。いずれも初恋がテーマですが、独自の表現がそれぞれの詩の雰囲気醸し出しています。

生徒は第1時に二編の詩の第一印象をとらえ、第2時には二編の詩を較べ読みすることを通して、それぞれの表現上の特徴を表に整理しました。さらに、生徒は岡田さんが工夫したワークシートの上に、詩の表現を抜き書きした付箋を貼ったり並べ替えたりしながら、自分が感じた第一印象が表現上のどういう特徴から引き出されたものかを考えました。

そのうえで本時(第3時)は、4人でグループを構成し、4人の付箋をあわせて整理する中で、印象と表現との結びつきを吟味し、どういう表現がそれぞれの詩の世界を作り上げているのかを考えました。最初に岡田さんが4人の付箋を集めて整理する方法を例示しました。生徒たちは、大きなワークシート上で似ている表現(付箋)をまとめ、それを一言で表すラベルを書き入れたり、複数の印象の関係を示す線を書き込むなどしながら、第1時に感じた印象を磨き上げていきました。各グループの発表が始まった瞬間、全員が発表者の方を向き、説明に耳を傾けました。これは「他のグループはどう考えたのだろう、聞きたい!」と思ったからであり、それだけ、本時のグループ活動は充実したものだったと言えます。グループからは、「初々しい」「誠実な恋」「素直になれない」「ませてる」などの印象が、表現と結びつけられながら出されました。最後に生徒は各自であらためて、二編の詩の印象を一言で記述しました。

授業後は、沼田市教育委員会指導主事・渡辺元子先生をはじめとして、近隣の7校の先生方、教職大学院の院生5名、そして実習校の先生方の参加を得て、検討会が開催されました。まず生徒がスムーズにグループ活動に取り組めたことが評価され、その理由として、前時までの授業の工夫、本時冒頭での教師によるモデル提示、課題の指示の適切さなどがあげられました。さらに、「グループ活動を通じて、詩から受け取る印象は深まったのか、それとも、小さくまとまってしまったのか」、「生徒が自分の感じた印象をうまく表現できない場合、どういう支援が考えられるか」、「一つの詩の中に大人と子どもが同居している。二編を対比させると、そのことが見えにくくなるのではないかな」等、本時の核心に関わる点について、活発な検討が行われました。

(文責 佐藤浩一)



鈴木 智信(児童生徒支援コース)

平成25年11月1日(金) 安中市立東横野小学校

児童生徒支援コース2年生の鈴木智信さんの「課題解決実習」に伴う公開授業及び実践検討会が、11月1日に勤務校の安中市立東横野小学校で行われました。

鈴木さんは、「小学校高学年の国語科における書く力を育てる指導方法についてーモニタリング育成による表現内容の構造化・推敲を通してー」を研究テーマに、勤務校での実践を重ねてきました。鈴木さんは、作文における子どもの課題を、全国学力・学習状況調査の結果やこれまでの指導経験から「記述前に文章の構成をとらえる力が弱い」と押さえました。この課題を解決するために、主に認知心理学の知見をもとに研究を進め、「作文過程のプランニング」に着目して、①書こうとする全体像を可視化できる、②記述の前に推敲できる、③記述しながら構成を確認できる、という効果がある「構成メモ」を活用する授業を構想しました。これと平行して朝学習ではスキルトレーニングを行ったり、他教科における書く学習と連動させ、学んだスキルや作文方法を日常の場面に使ってみる等の実践を行ってきました。

公開授業は、「意見文を書こう」の13時間中の8時間目で、ねらいを「意見文の『課題』『提案・主張』『根拠・具体例』が、読み手にわかりやすく構成メモにまとめられているか検討し合う」として行われました。構成メモの効果の①②を活かし、自分の構成メモを友だちにモニターしてもらい協同学習を行い、お互いに構成メモを推敲するという部分です。参観者は安中市教育委員会の中澤教育長様、山中学校教育課長様、樺澤指導係長様、近隣の小中学校の先生方、群馬大学教職大学院の院生ら25名余で、東横野小の先生方の参観もあり、教室は児童36名と参観者でいっぱいになりました。

授業は、これまでの授業で構成の特徴を学び取った作文例の構成メモを用意し、これを評価規準に即して検討するしかたを最初に鈴木さんが実演して見せ、続けて、このやり方を、話し合いの手順表に則って子どもたちが行うというものでした。子どもたちは熱心に話し合いましたが、手持ちの資料(自分の構成メモ、グループの友だちの構成メモのコピー、話し合い手順表、評価規準の示されている構成メモチェックシート)が多いために、これらを使いこなして構成メモの推敲の話し合いを進めるのは子どもたちにとって難しくもありました。

授業検討会では、中澤教育長様・鬼形校長先生のあいさつの後、協議において参加者全員から発言をいただき、推敲という難度の高い話し合いなので、メモ全体ではなく、観点を焦点化すること(たとえば「つながり」等)、はじめの説明や資料の数などをシンプルにすること、グループの構成を工夫すること(共通の課題の子どもで編成する等)等の提言をいただきました。また、道具(付箋紙)の活用が工夫されていること、単元全体の構想が緻密なことや深い学習が行われていること、学習の規律等が子どもに身に付いていることなど、積み上げられた成果を評価していただきました。最後に山中課長様、樺澤係長様より、協議での種々の発言を学級指導の基本や作文の学習指導におけるポイントととしてとりまとめていただくとともに、話し合いにおいては、子どもたちが、良し悪しの規準を共有し、話し合ったことのよさを実感し、意欲や作文の技能を高める指導が大切であるので、より一層、実践研究を進展させるようにとご指導いただきました。

(文責 武井英昭)



高橋 朋子(児童生徒支援コース)

平成25年11月20日(水) 太田市立藪塚本町小学校

児童生徒支援コース2年生の高橋朋子さんの公開授業及び実践検討会が、11月20日に勤務校の太田市立藪塚本町小学校(4年5組)で行われました。

高橋さんの研究テーマは、「特別な支援が必要な児童を含む認め合える人間関係づくり～SELを活用した支援～」です。高橋さんは、SELの理論を取り入れ、子ども同士が互いに認め合い成長しあうことができるような学級集団づくりをめざしました。社会性と情動の学習(SEL: Social and Emotional Learning)は、「自己の捉え方と他者とのかかわり方を基礎とした、社会性(対人関係)に関する、態度、価値観を身につける学習」と定義されています。高橋さんは、特別活動の時間や道徳の時間を中心に、SELで想定されている基礎的社会能力である「自己への気づき」「他者への気づき」「自己コントロール」「対人関係」「責任ある意志決定」という5つの能力の育成を図ってきました。

公開授業は、学級活動の共通事項(2)ア(希望や目標をもって生きる態度の形成)を目標・内容として、「よいところがしからのスタート ～自分をみつめよう～」という題材で行われました。前時の学級活動で「友だちのよいところをさがそう」という題材で授業をし、本時では、この授業を踏まえて、自己を見つめることをねらいとしました。また、SELの社会的基礎能力としては、「自己への気づき」「他者への気づき」「責任ある意志決定」の育成をねらいとしました。前時の振り返りを導入として、自分の「よいところ」について各自が考えました。一時の静けさが教室に漂い、子ども



たちは、自分のよいところを真剣に考え、自分と向き合っているようでした。その後、自分の思っている「よいところ」と前時に書いてもらった友だちが思う「よいところ」を比べました。子どもたちからは、「自分は運動が得意だと思っていたけど、友だちからは勉強だった」や「自分もみてるけど、相手もみている」など、自己と他者の見方の違いや相互関係を表すような感想がでていました。そして、最後に、「責任ある自己決定」として、

自分のよいところで、一番のばしたいところを一つ選ぶという内容でした。

授業後は、太田市教育委員会指導主事・戸崎勉先生や他校の教員3名、本学から教職大学院の院生2名、さらに実習校の先生方の参加を得て、検討会が開催されました。戸崎先生からは、SELという理論に基づいた新しい授業へのチャレンジが評価され、本時は特別な支援が必要な子どもも含めた人間関係を形成する場になっていたというコメントを頂きました。(文責 松永あけみ)

藤井 智章(児童生徒支援コース)

平成25年10月31日(木) 太田市立尾島中学校

10月31日、児童生徒支援コース2年生、藤井智章さんの公開授業が勤務校の太田市立尾島中学校(3年1組)で行われました。

藤井さんの研究テーマは、「伝え合う力を育む中学校国語科の学習指導—メタ認知の視点を取り入れた話し合い活動を通して—」です。藤井さんは教職大学院の入学前から、「話すこと・聞くこと」の実践に力を入れて取り組んでおられました。そして大学院入学後は、① Thinking Together Program、②メタ認知、③協同学習、という3つの柱で理論的な研究を進めました。理論的な研究から藤井さんは、互いを尊重する意識をベースに、自分たちの話し合いの仕方を意識的に振り返ったり、そこから話し合いをよくするための工夫(コツ)を引き出すことが、伝え合う力の育成に必要であると考えました。そこで今年度は4月当初から、国語の授業だけでなく特別活動や道徳などでも、生徒自身が大切な問題を話し合い、自分たちの話し合いを振り返る活動を組み込んできました。また話し合いが深まるよう付箋などの道具を工夫したり、話し合いを通じた学級集団の成長を『学級通信』で意識させたりしてきました。

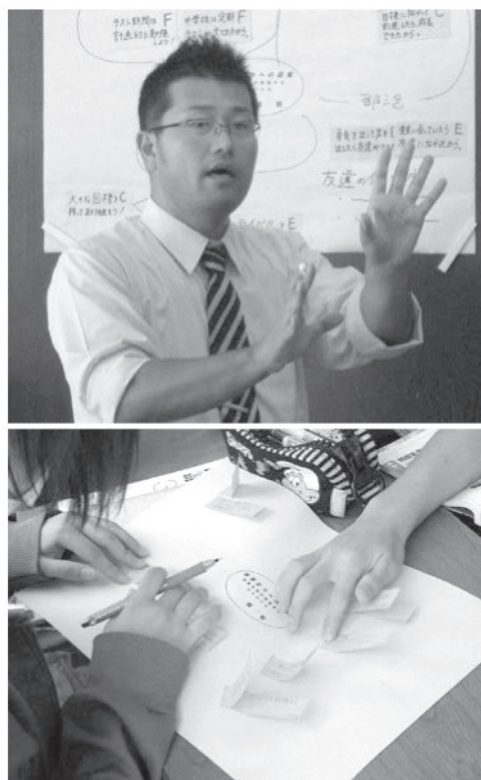
公開授業は、「課題解決に向けて話し合おう～卒業する私たちから新1年生に向けての提案～」、4時間構成の第2時でした。来年度に新たに入学してくる後輩に向けて、班ごとにB4判1枚のリーフレットを作り、それを『尾島中ガイドブック』としてまとめようという内容です。

生徒は第1時に、各自からのアドバイス(提案)と、その背景にある体験談を、青色と赤色の付箋に書いておきました。そのうえで本時は、4～6人の班で話し合い、自分たちの付箋をもとに2～3の内容に整理するという活動に取り組みました。この活動に先立ち藤井さんは、①これまで使ってきたコツを思い出す、②どういう話し合いをすればこの課題にうまく取り組めるかを班で考えクラスで共有する、③付箋の整理の仕方を教師自身がやって見せる、という方法で、その後の話し合いが深まる仕掛けをしておきました。生徒たちは、藤井さんが示した整理法をまね、コツを生かした話し合いをしながら、「勉強・部活・対人関係」、「団結について・協力について」などと付箋をまとめたり、新たなアイデアを書き込んだりしていきました。

授業後は、太田市教育委員会学校教育課課長補佐・今井東先生をはじめとして、尾島中学校の校長先生、群馬大学国語教育講座の中村敦雄教授の参加を得て、検討会が開催されました。

いずれの参加者からも、本時の授業は高く評価されました。本時の授業の意義について今井課長補佐からは、「藤井さんが目指す探究的な話し合いは、21世紀型の学力やスキルとして、これからの子どもにとって非常に重要である」との講評をいただきました。そのうえで参加者からは、授業の展開について、「言語活動ではしばしば手段が目的化することがあるが、本授業では目的と手段、方法と内容のバランスがとれていた」、「これまで学んだコツを、新たな課題解決に生かすというかたちで、習得—活用が一つの授業の中に実現されていた」等の意見が出されました。またこうした意義や構想が、生徒の学習として成立するための配慮について、「課題の目的や目指すべきゴールが、生徒に明確に伝えられていた」、「教師自身の実演により付箋を用いた話し合いにスムーズに入って行けた」などの意見が出されました。さらに藤井さん自身から、「4月から、まず、話し合える環境作り、生徒の力を引き出すための雰囲気作りを考えてきた」という発言もあり、本時の学習だけでなく、「学級経営」や「授業の中の生徒指導」にも広がる、充実した検討会となりました。

(文責 佐藤浩一)



村田 政人(児童生徒支援コース) 平成25年11月14日(木) 中之条町立西中学校

11月14日、児童生徒支援コース2年生の村田政人教諭(中之条町立西中学校)の公開授業と授業検討会が、勤務校である西中学校の3年A組で行われました。村田先生の課題研究テーマは「コミュニケーション能力を向上させる自由英作文の指導—中学校における英語のグループノートの活用を通して—」(仮題)です。

村田先生は西中学校唯一の英語教員として、全学年の英語科を担当されておられます。英語科の中で、どうしても指導が困難で、かつ後回しにされがちな「書く力」＝「自由英作文力」を伸ばすためにどうすればよいかということ、課題研究のテーマとして工夫を続けてこられました。

具体的な工夫としては、授業の中だけでは十分書くという行為の時間の確保が難しいため、グループを設定して、自由英作文ノートを書かせて、ある生徒の英作文に対して、さらに英作文で別の生徒が意見を書き、それに対して指導助言していくことをされてきました。もちろん、この「書く力」は、あくまでコミュニケーション能力を高めるためになされるものであり、全体として「話す」「聞く」といったことも踏まえた、バランスの取れたコミュニケーション能力を育成するという大きな目標を前提としています。その教育法として、上記のグループ別の自由英作文ノートを活用し、授業でも特に生徒同士のコミュニケーションを重視した授業を心がけておられます。本時も、村田先生の細心・緻密な準備に基づいた、たいへん優れた授業が参観できました。



本時は、英語科で「レジ袋を禁止すべきか否か」というテーマで、自由英作文を書かせる授業でした。教科書の中でも独立性が高く、指導にも工夫を要する難しい単元です。この自由英作文課題に、生徒が積極的に取り組むためのリアリティを与えるため、次のような工夫をされました。教科書では「レジ袋は禁止」という意見のみしかありません。これに「レジ袋に賛成」という異なる意見をALTであるFitz先生に述べてもらい、賛成・反対双方の意見を踏まえて、目の前のFitz先生に対して意見を伝達する英作文を書いてみるという、リアルな場面設定がなされました。

さらに、それを教師と生徒間の交流で終わらせないようにするため、その生徒の意見に対して、別の生徒が意見を付け加えるということを連続させ、生徒間で英作文でのコミュニケーションを成立させるような工夫を試みました。その際に特に英語の能力があまり高くない生徒にも、作文のための手がかりとなるワークシートや、それまでの授業のまとめのプリントなどの資料が手元にあるように配慮されており、生徒が授業時間に必ず何らかの知的活動が継続できるような工夫がこらされており、一コマの中で全員がしっかりと知的活動がなされる仕組みとなっていました。

公開授業には実習校の先生方が校長、教頭、専任の教員全員、本学M2も2名、M1も2名、他校の英語科の教員が6名、吾妻教育事務所の唐澤指導主事、本学から指導教員である山口、石川と多数が参加しました。授業後の研究会でも、出席している全教員から、自由英作文という難易度の高い課題に、積極的に高いレベルで取り組み、ほとんどの生徒が高い達成を示していることに、きわめて高い賞賛の言葉を賜りました。(文責：山口陽弘)

森坂実紀人(児童生徒支援コース)

平成25年6月27日(木) 群馬大学附属小学校

6月27日、児童生徒支援コース2年生の森坂実紀人教諭(群馬大学附属小学校)の授業公開と検討会が、勤務校である附属小学校の6年4組で行われました。森坂先生の課題研究テーマは「『造形的な見方』を身に付ける図画工作科の鑑賞の指導の工夫—パフォーマンス課題とルーブリックを取り入れた授業の試み—」(仮題)です。

森坂先生は附属小学校で主として高学年の図画工作科を担当されておられます。図画工作科の中でも非常に取り扱いが難しい「鑑賞」の授業に対して、教師がある題材の鑑賞を知識として教え込むのではなく、児童がある題材の特徴を自身で発見し、自身の言葉で説明できるようになることを目指しておられます。その教育法として、ジグソー学習などのグループでの協同学習を導入し、ヒントカードなどを利用させること、パフォーマンス課題の導入やそのためのルーブリックを作成することなどの工夫を試みています。森坂先生の周到な準備に基づき、また適切な机間指導などがふんだんにみられる非常に優れた授業が参観できました。



本時は、図画工作科において「少年ネロの憧れの画家」という題材を用いた鑑賞の授業でした。第1、2校時と二コマ続きの授業で、巧みな時間配分と児童に考えさせる時間を十分に与えました。本時のねらいとしては、ルーベンスの「十字架降下」というバロック期の絵画の一つの典型例の特徴をつかませるといふきわめて高度なレベルであり、最終的に「神の尊厳」「聖なる世界」「十字架から下ろされている絵だけれど、上っていつている感じがする」といった驚くほど優れた発言が児童の側からありました。「十字架降下」に代表される宗教画は、一般には児童には親しみにくいものであり、何の足場もなしにただ鑑賞することは困難です。そのため、多くの児童がよく知っており、登場人物が(アニメ版では)十歳程度の児童でもあり、親しみやすい物語でもある「フランダースの犬」を用いて、「ネロが見たかった絵とはどんな絵だったのだろう」という導入上の工夫がなされました。また、ルーベンス以外にアンジェリコ、ジョットというルネサンス期の二枚の絵画も対比のために提示し、三枚の絵の中でルーベンスはどれかを発見させる課題1を児童に与えました。その際、ルーベンスを三枚の絵の中から当てさせるのではなく、入念に配慮されたヒントカード(6カテゴリー全18枚)を児童に与え、6カテゴリーを意識させ、絵画の本質的な特徴に児童の意識が向くように授業が進行しました。ヒントカードと同時に教師の側で精緻に考えた発問系列によって、課題2の「ルーベンスの絵画表現の特徴をつかむ」ことを、グループでのジグソー学習の手法を取り入れて、一コマ目が終了しました。

二コマ目で課題3がなされます(課題1から3までは最初の段階で児童に提示されています)。課題3は「ネロになったつもりで『十字架降下』のどのようなよさを感じたか」を書かせるというもので、ここで再度最初の足場の部分に戻ってきます。その際も部屋を暗くしてスポットライトを当てる工夫などを随所に凝らして、ネロの気持ちにより添って鑑賞する配慮がなされました。

公開授業には実習校の先生方多数をはじめ、本学M2も4名、M1も3名、附属中学、本学からも春原先生、豊泉(清)先生など多数が参加されました。授業後の研究会でも、副校長ほかから、本時の児童の達成レベルの高さに対して、高い賞賛の言葉を賜りました。(文責:山口陽弘)

石川 重昭(学校運営コース) 平成25年10月9日(水) 太田市立毛里田中学校

10月9日、学校運営コース2年生の石川重昭さんの公開授業と実践検討会が、勤務校である太田市立毛里田中学校で行われました。



石川さんの課題研究のテーマは、「学校安全推進体制の改善・充実に向けて一学校安全担当教員による学校安全マネジメントの充実への取組を通して―」です。石川さんは、児童生徒を取り巻く現状の学校内外には広範で多様な危険や課題が潜んでいること、国や地方公共団体、学校や地域自体でも様々な安全教育の取組が進みつつあることを踏まえ、対処療法的な指導から生徒の主体的な行動を促す指導へと、指導の質的な充実を図るとともに、平成24年度から学校において「学校安全担当教員」の設定がなされたことを受けて、指導の成果を挙げるためのマネジメントの在り方に着目し、実践的な研究に取り組んでいます。

具体的には、石川さん自身が学校安全担当教員として、学校全体の安全教育を推進するとともに、家庭や地域への広報活動を活発化し、生徒には主体的な行動が取れるように学校行事や生徒会活動などの特別活動、総合的な学習の時間などを中心とした幅広い指導を行ってきました。その中でPDCAサイクルに基づいた学校安全マネジメントの充実を図ってきました。

その結果、生徒たちの安全に関する意識やそれに伴っての行動が大きく向上する様子が明らかになりました。それは、交通安全教育や防災教育の両面で具体的な成果として表れてきています。例えば、学校安全の取組に関する学校評価では、平成24年12月の評価と平成25年7月の評価を比較すると、特に保護者評価で「充実が見られる」という意見が65.1%から75.5%へと増加したことなどに表れています。また、地域の住民からも毛里田中学校生徒の交通マナーが改善された様子に感動しているという声も寄せられています。

実践授業は、生徒会活動「安全委員会」の時間が公開されました。月一回程度の委員会活動の時間ですが、石川先生が指導する安全委員会の1~3年生の生徒たちは、異学年集団であるにもかかわらず、4月以降「自転車安全点検プロジェクト」「自転車通学マナーアッププロジェクト」「交通安全教室の開催」「校内危険箇所パトロールプロジェクト」「校内環境整備プロジェクト」等に取り組み、大きな成果をあげました。当日の授業は前期委員会活動のまとめでしたが、各自の発表内容の良さだけでなく、活動に取り組んだ生徒たちが安全に対する認識を高め、自主性・自発性と自己有用感を深めている様子が伺えました。



実践検討会では、参加者から指導に対する高い評価とともに、今後の課題として、こうした活動をより全校に広げ定着させていく方策についての指摘などがありました。最後に、太田市教育委員会健康教育課の細谷寿夫指導主事から「太田市全体で取り組むべき安全教育でこうした先進的な実践が行われていることの価値が高いことと、生徒たちが家族への配慮や、中学生自身のモラルやマナーなどについての気づきを発表しており、人間力としての「生きる力」の育成にも結びついている」という指導講評がありました。

公開授業及び実践検討会には、県教委東部教育事務所の藤倉指導主事や太田市内中学校の先生方の参加がありました。本学関係者としては、矢島教授、新藤准教授、高橋講師の他、教職大学院1年生・2年生が8名参加し、検討会の最後に矢島から関係者に謝辞を申し上げました。(文責・矢島)

糸井 広江(学校運営コース)

平成25年11月22日(金) 桐生市立相生小学校

11月22日、学校運営コース2年生の糸井広江さんの授業公開と実践検討会が、勤務校である桐生市立相生小学校で行われました。

糸井さんの課題研究テーマは「充実した小学校生活のための連携体制の構築～保護者連携と学びをつなげる幼保小の交流を通して～」です。糸井さんは、いわゆる小1プロブレムという言葉に象徴されるように、小学校入学に伴う生活の変化によって1年生児童が適応でつまずいたり、保護者も学校の様子がわからずに不安を抱えたりする状況を課題と捉え、保護者への適切な情報提供や学校生活づくりへの積極的な参加を促す様々な工夫を考えました。また、児童が就学前の幼稚園や保育所などでどのような生活や学びを深めてきたのかを小学校が十分に理解できていない実態も課題と捉え、就学前後の児童の生活のスムーズ適応、学びの経験を生かした学校間接続とカリキュラム開発・組織・運営のあり方を実践を通して研究しようとしてきました。

具体的には、保護者に入学前の就学時健康診断や入学説明会の際から学校生活についての情報を提供するとともに、小学校教員との連絡や相談がしやすい状況を構築してきました。また、入学後は、保護者の目線に立った「おたより」の発行や、保護者同士の相互理解が図れるような授業参観や体験参加型学級懇談会などを意図的に導入してきました。さらには、個々の児童の様子についても「良さを明確にする」観点から保護者に適切に伝え、家庭での生活とリンクさせ、家庭での生活の改善の観点となるように配慮した学級経営を行ってきました。また、幼稚園や保育所との連携については、就学前に関係の園所と連絡を取り合い、児童の様子を把握してから入学に備えるとともに、入学後も連携を深め、相互の授業参観や教職員同士の研修交流の機会を設定してきました。さらには、児童と幼児(園児)との交流の機会も積極的に取り入れたカリキュラム開発も行いました。



また、糸井さんだけの実践ではなく、1年生の学年主任として1年生全学級でも同様な体制で取り組めるようにするとともに、1年生担当の教員各自の特徴や良さを生かして全体での指導に当たれる学年経営の充実も図ってきました。

当日の授業公開では、生活科「あきのおもちゃだいしゅうごう～親子で作ろう～」の授業を公開しましたが、ほぼ全ての保護者が授業に参加し、児童とコミュニケーションを交わしながら、学校生活や学習の様子を参観しました。また、児童は、「作ったおもちゃで幼稚園児と一緒に遊ぶ」ことをめあてとして、積極的に学習に取り組んでいました。保護者からは、四月の入学時と比べて目を見張る

ほど成長した姿が理解できたとの感想がありました。その後の「学級懇談会」も参加者に公開されましたが、保護者はワークショップスタイルで「ものを大切にしよう～お小遣いをあげる時期に来て～」というテーマで積極的な意見交換をしていました。

その後の実践検討会は、自校や他校の小学校の先生方はもとより、幼稚園の先生、保育所の先生、さらには保護者も加わって、話し合いが行われました。幼保の先生方からは「小学校に上げる不安を常に持つのだが、こうした連携は本当にうれしい」、校内の先生からは「年間の計画が明確でお互いのアイデアが生かせる学年会になっている」、保護者からは「小学校に入学前の不安が少ないだけでなく、保護者同士の関係が密になりとてもありがたい」などの意見が出されました。最後の桐生市教委の蜂須賀指導係長の指導講評では「『保護者連携と学びの接続』という二本柱の研究がとても素晴らしい、計画的、継続的、組織的な実践研究によって児童の学びの連続性が保障されている」という高い評価をいただきました。

教職大学院からも山崎教授、矢島教授、新藤准教授の他、M1・M2の院生が数多く参加しました。検討会の最後に矢島から本間校長をはじめ関係者に謝辞を申し上げました。(文責・矢島)



大石 一弘(学校運営コース) 平成25年12月6日(金) 渋川市立赤城北中学校

学校運営コース2年生の大石一弘さんの実践検討会が、勤務校である渋川市立赤城北中学校において、12月6日に行われました。なお、今回の実践検討会は、渋川市教科等主任会授業研究会（中学校理科部会）との合同開催で行われました。



前半の授業研究会では、大石さんと、勤務校指導教員でもある木本和己先生とのTTによる授業「地球の運動と天体の動き」（3年生）が公開された後、参加者による研究討議が行われました。授業は、生徒たちがあらかじめ行った観測結果をもとに、東西南北の空と天頂での星の動きを班ごとに透明半球にプロットし、それを、天球儀やシミュレーションソフトウェアを活用して検証するというものでした。指導助言者である田中和徳・渋川市教育委員会指導主事からは、生徒たちの活発な活動、星・天体に関する生徒たちの「見方」

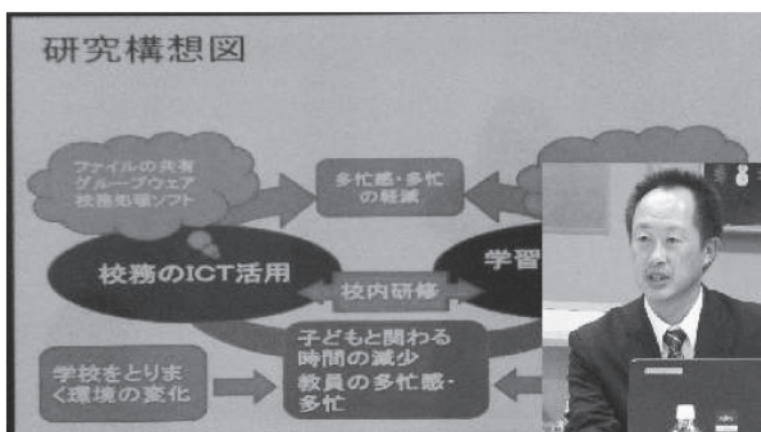
の変容などを高く評価する講評をいただきました。

後半の課題研究についての報告では、「教員の多忙感を軽減する学校運営の改善— ICT 活用による校務の効率化—」というテーマでの課題研究の内容が報告されました。

具体的には、校内研修により教職員の共通理解を図りながら、「校務への ICT 活用（ファイルの共有、グループウェア活用など）」、「学習指導への ICT 活用」を推進することにより、教師たちの多忙・多忙感を解消し、子どもとかわる時間をより多く確保することがめざされました。

後者の「学習指導への活用」については、実例として、上述の研究授業が提示されました。

前者の「校務への ICT 活用」については、第1に、校内のサーバのファイル階層構造の抜本的改革、すなわち、各自が時々の必要感に応じてバラバラに作成した結果、フォルダがサーバ内に乱立し、必要なデータの検索が困難になっていたものを、校務の流れに沿ってフォルダを整理した上で利用ルールを整備した実践が報告されました。



第2に、日常の成績処理を通知表や調査書作成に有機的に結びつけるシステムの開発と活用について、第3に、フリーソフトを用いた電子掲示板の活用による朝会の合理化の実践が報告されました。これらの実践が具体的に校務の改善に結びついている様子が説得的に提示されました。

授業および検討会には、足田克彦・赤城北中学校長、栗原均・古巻中学校長をはじめ市の中学校理科部会の先生方など、数多くの参加をいただきました。教職大学院からは、指導教員である岩澤、山崎が参加しました。
(文責：山崎雄介)

柴山 和宏(学校運営コース)

平成25年11月1日(金) 群馬県立利根実業高等学校

11月1日、学校運営コース2年生の柴山和宏さんの実践報告会と実践検討会が、勤務校である群馬県立利根実業高等学校で行われました。

柴山さんの課題研究のテーマは、『「人間力」を身につけた技術者を育成する学校』です。柴山さんは、先行研究などを分析する中で、工業教育には「人間力」を育成する上での重要な素地が兼ね備わっていると考えるとともに、専門の技術・技能だけでなく情熱や態度を含む「人間力」の育成が今後の工業教育では一層重視されると考えました。そこで、「人間力」を「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」ととらえました。そして、「基礎学力」「コミュニケーション力」「意欲・忍耐力」を3つの柱として、その基盤には「人間性・基本的な生活習慣」を据えて実践研究に取り組んできました。

具体的には、柴山さん自身が科長を務める利根実業高校の「機械システム科」の先生方と協働して実践に取り組んできました。利根実業高校は校長先生のリーダーシップのもとで「日本一の利根実業高校」を目指して、教職員、生徒が一丸となって勉学に取り組んでいます。柴山さんは、授業の中でも工業学科の科目として特色があり、「人間力」の育成には好適な特長を持つ「課題研究」の授業を軸に、生徒達の発想を生かし、体験的な活動が広く行えるカリキュラム編成を行いました。その結果として、「課題研究」の時間では、少人数コース別班編制を行い、生徒が主体的に選択した班で、外部との連携を図りながら活動を進めていく実践を展開しました。



これまでに、各班ともにさまざまな活動を行ってきましたが、今回の実践報告会では、3年生の機械システム科の生徒全員が、仲間の発表を聞くという場を作りました。そして、柴山さん自身が指導に当たった「地域貢献班」をはじめ、高大連携を取り入れながらマイコン制御による自動散水装置を地域に設置し、農業系学科や同じ工業系でも環境技術を学ぶ学科の生徒たちとも連携して取り組んだ「農工技術連携班」、マイコンカーラリーへの参加と好成績を目指しながら、地域の中学校への出前授業も行っている「マイコンカーラリー班」、高度な技術の習得とともに、ものづくりコンテストへの参加なども行っている「旋盤技能研究

班」などの発表が行われました。中でも「地域貢献班」の発表は、「人間力」の重要性を生徒自身も肌で感じ取り、生徒自らが自己変容を体感したことが発表され、参会者の感動を呼んでいました。

専門高校における体験的な活動を軸とした創意あふれる実践は非常に意義深いことが理解できる実践報告会でした。足利工業大学教育連携センターの飯野洋一副センター長からは、生徒達の発表に「人に喜んでほしい、人を喜ばせたい」という気持ちと「有機的な学び」によって挑戦する姿が良く表れている、それぞれの活動の完成度も高く、さらに高い技術を目指した取り組みも広げて人の心を豊かにする人間に育ってほしいという言葉いただきました。

その後に行われた実践検討会には、利根実業高校機械システム科の3年生全員が参加しました。生徒、保護者、沼田市役所他の地域機関関係者から多くの発言がありました。最後に県教委高校教育課関口真指導主事から「地域に愛されて地域人材を育む学校において、実践研究テーマを具現化する日頃の活動の充実した姿がよく見とれた。課題研究は工業の集大成ともいえる科目であるが、そこでの学習で生徒の自己有用感も見られ、キャリア教育の観点からも素晴らしい。」という趣旨の指導講評がありました。

実践報告会及び実践検討会には、本学関係者としては、矢島教授、山崎教授、新藤准教授の他、教職大学院1年生・2年生が7名参加し、検討会の最後に新藤准教授からまとめと関係者への謝辞を申し上げます。(文責・矢島)

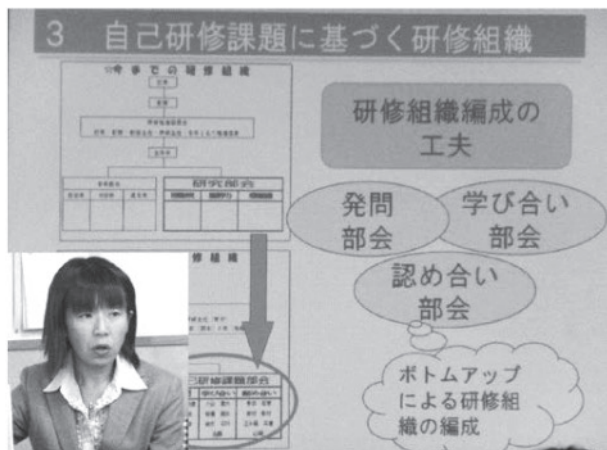


野村 聡子(学校運営コース)

平成25年11月20日(水) 伊勢崎市立境剛志小学校

学校運営コース2年生の野村聡子さんの実践検討会が、勤務校である伊勢崎市立境剛志小学校において、11月20日(水)に行われました。

野村さんは、「職能成長と組織力向上が実現する校内研修に関する研究～課題別グループの活性化を通して～」というテーマのもと、研修主任として課題研究を進めてきました。



とくに、校内研修テーマの追究がより一人ひとりの教師の授業力向上につながるようにしたり、研修組織に個人がより積極的に参画できるように研修組織編成を工夫したり、といったことに野村さんは意を用いました。まず、年度当初に、アンケートにより教師全員の授業に関する課題意識を集約し、それにもとづいてボトムアップで研修組織(発問部会、学び合い部会、認め合い部会)を編成しました。これらの部会は、たとえば指導主事訪問の際の代表授業の検討なども含め、研修のあらゆる場面で活躍

します。

さらに、部会ごとに自己評価シートを検討し、自分の授業の省察や部会での授業研究会に活用する、各部会でのとりくみを「研修だより」で共有するなど、随所に工夫が凝らされました。

検討会当日は、こうした研修の成果として、野村さん自身による社会科の授業「工業生産と工業地域」の授業(5年1組)が公開されたあと、外部からの参観者も交え、課題別グループによるワークショップ型の授業研究会が行われ、その後、課題研究の成果発表と質疑が行われました。

授業では、日本の工業地帯・地域について、工場の分布図と地域ごとの産業別生産額の棒グラフという資料から読み取ったことについて、子どもたちは班の中で、「みんなが共通に気づいたこと」、「1人しか気づいていないこと」を手際よく付箋で整理し、少数意見について、資料と照らしあわせながらその妥当性を検討しました。班での話し合いの活発さに加え、その後の全体での発表でも、他の班の発言をよく聴いて反応している子どもたちの姿が印象的でした。



その後の授業研究会、研究成果発表をうけ、伊勢崎市教育委員会の川端良信指導主事から、学力向上が群馬県全体の至上命題となる中で、その前提として学校の組織的なとりくみの必要性が指摘されたうえで、「ボトムアップでの組織の活性化」、「研修の継続性」(当日の野村さんの授業は、約1週間前に行われた要請訪問の代表授業からの発展という側面をもっていました)、「部会・個人の課題の明確さ」などの点について高く評価する講評をいただきました。

当日は、川端指導主事のほか、小畑浩二校長をはじめ境剛志小の先生方全員、伊勢崎西中学校、第三中学校など近隣校の先生方とともに、教職大学院関係では、矢島教授、修了生の大川紀章さん(伊勢崎市立南小)、M1の院生2名、指導教員である岩澤、山崎が参加しました。

(文責：山崎雄介)

福田 博之(学校運営コース)

平成25年11月6日(水) 前橋市立箱田中学校

学校運営コース2年生の福田博之さんの実践検討会が、勤務校である前橋市立箱田中学校において、11月6日(水)に行われました。

福田さんは、『学校力』を高めるための校内研修～A中学校におけるOJTの実践を通して～』というテーマのもと、研修主任・2年生学年主任として課題研究を進めてきました。

まず、「学校力」を高めるための手だてを、「教師の授業力の向上」、「教師の対応力の向上」、「若手・中堅教師の資質向上」の3つに整理した上で、それぞれに対応するOJT(On the Job Training)を、「授業力向上OJT」、「対応力向上OJT」、「若手・中堅交流OJT」として設定しました。



そもそもOJTとは、研究指定など特定の時期だけ「無理して頑張る」ものではなく、日常業務を遂行する中での職能成長を図るものです。そのため、福田さんは、授業力向上OJTの舞台となる学年会や、若手・中堅交流OJTのための時間を校時表に組み込むことによって、無理なくOJTが実施できる工夫をしました。

その他、年度当初にワールドカフェ形式で「チーム箱田中のめざすもの」について率直に意見交換を行ったり、相互授業参観をより実りあるものにするため、アドバイスマシットや研修だよりといったツールを活用するなど、きめ細かい手だてが講じられてきました。

検討会当日は、授業力向上OJTおよび若手・中堅交流OJTの成果の一端として、後者について福田さんとペアを組んだ若手教師である金井智砂先生をT1、福田さんをT2として、2年3組で学級活動「職場体験活動に向けて」が公開されました。前半では、前時までに抽出された職場体験の3つのキーワードをもとに、班討議～クラス討議を経てクラスのスローガンを決定し、後半では、そのスローガンをもとに、個々の生徒が「今日からできる個人目標」を決め、発表しあいました。

その後、図書室に会場を移し、金井先生から、授業説明とOJTについての若手教師としての受け止めについて率直にお話いただいた後、福田さんから課題研究についての報告がありました。先に述べたような福田さんのとりくみについては、講評をいただいた後藤章・前橋市教育委員会企画係長から、多忙化の改善という課題と両立する形でのOJTを実現したことについて高く評価していただいたのはじめ、「授業での生徒の姿に学校力があらわれている」とのご指摘も参加者からいただきました。

授業および検討会には、指導教員である岩澤、山崎の両名とともに、立見康彦校長をはじめ箱田中学校の先生方、近隣の中学校の先生方にご参加いただきました。教職大学院からは、音山准教授、M2・M1の院生8名が参加しました。



(文責：山崎雄介)

増田 和子(学校運営コース) 平成25年12月2日(月) 前橋市立城南小学校

学校運営コース2年生の増田和子さんの実践検討会が、勤務校である前橋市立城南小学校において、12月2日に行われました。

増田さんは、「ビジョンを共有することで実現する学校組織の活性化～教師間コミュニケーションで作成する自己申告書の作成・活用を通して～」というテーマのもと、研修副主任として課題研究を進めてきました。



増田さんは、2000年前後から全国的に導入が進んだ「新しい人事評価制度」と、その主要ツールとしての「自己申告書」が、「教師の資質・能力の向上（職能開発）」と、それを通じた「学校組織の活性化（学校の組織力の向上）」とを意図しているにもかかわらず、後者の目的の達成状況が思わしくないことを解決すべき課題として設定しました。

とくに、自己申告書作成にむけてのコミュニケーションが、もっぱら管理職と個々の教師との垂直的コミュニケーションに終始しがちなことが、上記の課題の原因であり、その課題の解決のためには、教師間の水平的コミュニケーションを活性化することが有効であるとの仮説が設定されました。

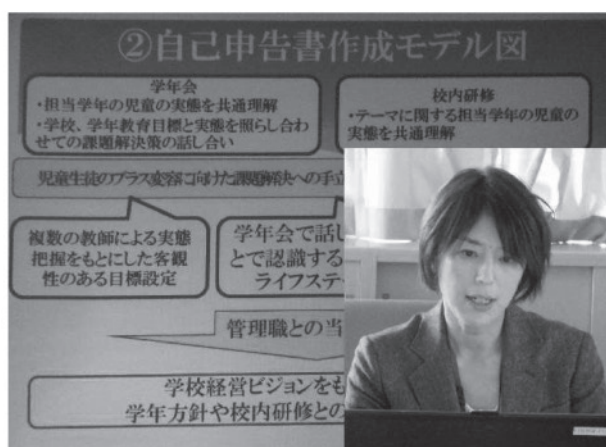
具体的には、「学年会」と「校内研修」という2つの場において、教師間のコミュニケーションにより、学校のビジョンを共有し、そのことを自己申告書作成に活かすことで、学校組織の活性化・学校の教育力の向上、児童のプラス方向の変容を実現することがめざされています。

当日は、その校内研修（主題：豊かな社会性と人間性を備えた児童の育成～ソーシャルスキルトレーニングと体験活動の関連を通して～）のブロック代表授業としての性格も有する増田さんの授業「中学に向け、前向きな気持ちになるために」（6年生、学級活動）が公開された後、課題研究についての報告と研究協議が行われました。

授業公開および検討会には、指導講評者として後藤章・前橋市教育委員会教育企画係長をお迎えし、山賀教頭をはじめ城南小学校の先生方、市内の小学校の先生方にご参加いただきました。教職大学院からは、指導教員である岩澤、山崎のほか、高橋講師、M2・M1の院生6名が参加しました。

今回の協議の特徴としては、増田さんと共に課題研究を進めつつあるM2（現職）の院生から、自身の検討会での討論から得たアイデアが披露されたり、M1の院生から、自身の研究計画に引きつけた質問が出されたりと、教職大学院の研究同士が相乗的に刺激しあう場面がみられたことです。

後藤係長からは、人事評価の形骸化を克服するため、また近い将来の教師集団の世代交代も見据え、学年会などを活用した水平的コミュニケーションを組織した増田さんの研究を高く評価する講評をいただきました。（文責：山崎雄介）



柵木みどり(学校運営コース)

平成25年10月31日(木) 藤岡市立神流小学校

10月31日、学校運営コース2年生の柵木みどりさんの公開授業と実践検討会が、勤務校である藤岡市立神流小学校で行われました。



柵木さんの課題研究のテーマは、「子どもたちが過ごしやすい学校生活を支える指導の在り方―指導内容の重点化と協働する教職員組織の充実―」です。柵木さんは、望ましい生徒指導の在り方について考察し、小学校児童の学校生活の質的な充実こそが児童にとって最も好適な生徒指導であると考え、学校全体で共通理解と協働による指導の展開を図るための研究を進めています。昨年度は、県内の多くの学校を訪問し、そこで行われている特色ある取り組みや充実した指導の様子を調査してきました。その結果、「社会性を育てる」「学力を高める」「地域との関わりを深める」という3点に重点をあてて実践的な研究を進めてきました。

具体的には、柵木さん自身が生徒指導主任として、学校全体の生徒指導の全体計画を立てるとともに、「あいさつ」「読書」「言葉づかい」「そうじ」という児童の日常の学校生活でのポイントを学校全ての先生方で役割分担し、重点化しつつ、協働体制に基づいた指導が進められるような学校運営マネジメントに取り組んできました。さらには、5年生の学年主任としてもリーダーシップを発揮し、単に学級に目を向けるのではなく、学年の先生と協力して学年全体としての充実を図るように取り組んできました。全体計画に基づき、計画的に実践を進めるとともに、先生方の多忙化の解消にも配慮して、会議をコンパクトにし、回数も減じながら、実のある生徒指導の推進ができるように工夫してきました。

その結果、児童の学校生活における活動や、児童間における他者への尊重意識がとても向上しています。特に、課題研究の実践のフィールドである5年生においては、児童同士の協力・協同の意識が急激に高まっている様子が窺えました。参観者で昨年度は神流小に勤務し、本年度は他校に勤務されている先生からは「児童が半年で見違えるように立派に和やかになった」というようなご意見も窺えました。柵木先生は、1年間の主な学校行事を中心に、児童に「4つのステージ」という具体的な成長目標を示唆し、児童は主体的にそれに向けて目標を立て活動している姿は参観者にも深い感銘を与えていました。



「6年生に向けての最終ステージ」の在り方をみんなで考えていこうとする学級活動が、実践授業として公開されました。議長団を務めた計画委員の児童を中心に、個人の立案した目標をグループや学級全体で話し合っ深めていこうとする児童の取り組みが見られました。

実践検討会では、参加者から「ステージ性」や「教員の役割分担制」などの工夫への評価がありました。今後の課題としては、「それぞれの教員の個性を生かしながら学校全体としてどう取り組むかを一層考察すべき」という意見もありました。最後に、藤岡市教育委員会学校教育課の山田雅彦指導主事から「研究テーマや内容が、規律ある学校生活の実現や相手への思いやりなどにつながっており、話し合い活動を通して物事の解決を図ろうとする態度の育成につながっている。環境の良い中で学ぶ児童の姿からキャリア教育としての意義も感じられる」という指導講評がありました。

公開授業及び実践検討会には、市内小学校のキャリア教育(進路指導)担当の管理職や一般の先生方の多数の参加がありました。本学関係者としては、矢島教授、新藤准教授、高橋講師、清水非常勤講師の他、教職大学院1年生・2年生が8名参加し、検討会の最後に矢島から関係者に謝辞を申し上げます。(文責・矢島)